

三木露風となか夫人

―詩人露風を支えた愛妻モニカ―

近藤 健史

はじめに

三木露風（一八八九年―一九六四年）は、明治末期から大正期において近代日本を代表する詩人として北原白秋とともに「白露時代」を築いた。露風は、東京で生活と戦い、芸術に苦悶しながら創作につとめた。その詩人露風を身近にいて支えたのは、なか夫人である。

しかし、これまで露風の夫人に関してはほとんど論じられず、洗礼名の「モニカ」の名で短歌・俳句・詩などの作品を残していることも知られていなかった。

そこで本稿は、なか夫人に関する未公開の新資料を基に、詩人露風を文学的に支えた「愛妻モニカ」とその作品について初めて明らかにする。

一 なか夫人の生涯

なか夫人は、旧姓栗山なか、明治二三（一八九〇）年六月二九日生まれ、第四女で末っ子である。露風は、明治二二（一八八九）年六月二三日生まれであり、二人は一歳違いである。

結婚のいきさつについて、露風の書き残したものはない。昭和四九（一九七四）年に三木家に養子に入った三木豊晴は、露風の結婚は挫折を感じていた時期と述べている。^{（注1）}

露風は若い頃、失恋と詩作活動に対し挫折感を味合う時期があり、その時に母仲と知合い結婚しました。献身的に露風に尽くす事で露風は甦る訳ですが…。

また二人の出会いに関しては、露風の出身地兵庫県龍野に近い、若狭野（現相生市）生まれの小説家水守亀之助が随筆に記している。^{（注2）}水守は、龍野中学生の露風と知り合い、明治三九（一九〇六）年に上京、大正八（一九一九）年に新潮社に入社して編集者生活の傍ら作家活動に入り、露風がトラピスト修道院に赴任する前の大正七、八年頃まで親しく交流していた。

露風は、淀橋十二社の宿で知り合った婦人と結婚して以来、この糟糠の妻を守り通し、修道院へ行つた時も夫婦連れであつた。その點は幸福だったといへよう。

露風となかは大正二（一九一三）年一月三日婚約、翌三年一月に結婚した。大正九（一九二〇）年五月、露風が北海道トラピスト修道院講師として赴任し夫婦で教師館に住む。大正一一（一九二二）

年四月一六日に夫婦で洗礼を受け、なか夫人はモニカ、露風はパウロという洗礼名である。大正一三（一九二四）年六月三〇日トラピスト修道院を辞して上京、昭和三（一九二八）年七月北多摩郡三鷹村牟礼（現三鷹市牟礼）に新居を構え永住する。露風は昭和三九（一九六四）二月二九日逝去、なか夫人は昭和四九（一九七四）年四月一九日逝去、八五歳で生涯を終えた。

二 夫としての露風を支えた夫人

（一）大きな子供を育てる夫人

露風の第三期門下生である詩人安部宙之介は、なか夫人が語った結婚生活について次のように伝えている。^{（注3）}

相手が詩人では苦勞するからと夫人の親戚が反対するので結婚がのびていたが、母上だけは承知していた。（中略）露風は池袋時代に床屋へ行きしらくも（白癬）をうつされ、それが顔まで広がりひどい目にあった。それからは床屋に行くことが恐ろしくなり家でなか夫人が鋏で刈った。慣れないので虎狩りになる。（中略）露風は自分では剃刀も爪切りも使えないので夫人に頼ったようだ。

また、家森長治郎は、夫人から夫としての露風について聞き伝えている。^{（注4）}

露風は夫としては零でした。妻を養おうという考えが無いのですから。普通の方だったら三日ともたないでしょう。（中略）

もし自分が逃げ出してしまったなら、露風は干乾しになるだろうと思うと、不憫でならなかった。二人の間に子供がなかったから（露風が原因）、いっそ、大きな子供を育てていると思つたならば、或は露風に仕えてゆけるだろうと思つて、それからは心のもち方を変えた。

子供のような露風の性格とは、どのような性格だったのか。若い頃から露風と交友関係にあった水守亀之助は、露風の性格について「どうにもやりきれない性格」であり、それゆえにカトリック信仰の道へと進んだのではないかと述べている。^{（注5）}

何しろ、あのわがままで怒りっぽくて、傲岸な露風のお守り役を務めて来た夫人の多年の苦勞は察するに餘りある。（中略）自尊心が強くて自信満々ながら、いつも對人関係では對抗意識が熾んだから、イラ／＼してあるやうな弱さがあった。さうした、どうにもやりきれない性格が、一層「神」の觀念に向はせたのかも知れない。

その我慢できない性格のためか、若かりし頃は、龍野中学、閑谷齋、早稲田大学、慶応大学などを中退している。

（二）経済に無頓着な露風を支える夫人

栗山家の親戚が「相手が詩人では苦勞する」と危惧をいだいたのは、露風の性格だけではない。それは、経済に無頓着な露風を支える夫人の苦勞でもあった。

結婚当初の経済状況は、収入が少ない夫婦が住むには贅沢な住ま

いであり、来客も多く困窮していた。大正三（一九一四）年一月に結婚して最初に住んだ池袋の家は、六畳、四畳半、二畳、二畳で、廻り縁、植木が沢山ある広い庭、門もある贅沢な家であった。家賃は、六円である。安部宙之介によると、その頃は『文章世界』の詩の選考料五円、『新天地』（漢文の本の付録雑誌）の詩選考料二円、合計七円の定収入しかなかった。大正七（一九一八）一月に引越した雑司ヶ谷亀原の家にしても、元歯科医のもので二階家の洋館、八畳、六畳、台所で家賃十円と高額であった。^(注6)

また結婚の前年の大正二（一九一三）年秋に「未来社」を結成し、月一回の例会を自宅で開催、翌三年に雑誌『未来』を刊行するなど、北原白秋と詩壇を二分していた頃でもあり来客が絶えず出費が多かった。池袋時代は、柳澤健や前田鉄之介など若い人が毎日、たまに西条八十、北原白秋、若山牧水が訪れたという。大正七年五月の日記には、病気の弟勉に肝油ドロップス二罐を送ろうと思ったが、お金がないので露風の縫わずにあつた大島一枚を夫人に持たせて買^(注7)い求めたとある。雑司ヶ谷の家でもまた、来客が多く山田耕作や齋藤佳三が訪れた。

家森長治郎によると露風は、経済的に困窮していたにもかかわらず、毎朝牛乳を飲み、新聞は二種類も取っていた。生活費の不足を補うために夫人は持っていた着物を売り、夜の二時頃まで針仕事を^(注8)して生計を支えたという。きちんと勤めることなど性に合わない、経済に無頓着だった露風が原因で、夫人は経済的な苦勞の連続であった。

(3) つつましく家政を上手にして支えた夫人

トラピスト修道院講師時代は月給七十円と収入が増加したが、露

風はよく旅をすることから経済的には決して裕福とは言えない生活であった。

ある日、露風が感冒から肺炎を併発して修道院の教師館で病床に臥せていた。そこに『函館毎日新聞』の記者が、函館の童謡童話劇会の指導と講演の依頼に訪れた。露風となか夫人は、初対面の記者に対し温かく接してくれたと記事にあり、夫人の人柄がうかがえる。^(注9)

取次に出られた白いエプロン姿の奥さんが快よく応接間へ通して呉れた。（中略）要事も済むので病人に長居は失礼だと思つて帰らうとした処、要意をしたから昼御飯を食べて行くと奨められたのでたつて辞退するのも礼儀でないと思つたから同行の加藤氏と共に別室の簡易な食堂に入つて三木氏と奥さんの心からの歓待を受けた。（中略）奥様の御親切から出帆時間の来た事を知つた…。

夫婦が暮らす教師館は、修道院の坂下であり「小じんまりとした真四角な青いペンキ塗りの洋館と、日本建ての家と一緒にあつた家の、小さな柵のような門を押して入ると、玄関に鶯が籠の中から客を迎へ顔に啼く。その西洋館の方に露風氏は夫人と住んでいる。室内には畳が敷かれ壁の上に錦絵なども掛かっている。」^(注10)その「山奥の小学校の分教場でも思わせるような洋風の建物」の間取りは、「玄関二畳を挟んで右手に六畳と、その後ろに四畳半があり、左手に八畳とその後ろに六畳二た間が並んでいた。台所、風呂場などは玄関の奥にあつた。夫婦二人の住居としては広過ぎる位だった。」^(注11)ようである。

修道院を辞して上京後の経済状況は、大正一三（一九二四）年六月末に修道院を去るときに知人から二百円を借りて帰京、翌年から数冊の著書を出版し印税が入るなど好転する。また昭和三（一九二八）年、なか夫人の遠縁関係にある板橋家から土地を譲ってもらい、北多摩郡三鷹村牟礼に家を新築、隣に貸家三軒を建て家賃による定収入を計る。後には文学全集や童謡「赤とんぼ」などの印税が入るようになるが、金銭に対して無頓着であったことは一生を通じてのことで、夫人は苦勞したようである。

なか夫人は長い間、つつましく家政を上手にやっていた。三木豊晴は、その三鷹時代の生活を伝えている。^{（注12）}

同世代の北原白秋・山田耕筰と違い露風は生活とか身の周りには無頓着なようでした。また派手さを嫌い自然のままの生活を好んでいたようです。衣服も仲が用意したものを着て、出されたものを食べて、電化製品も最低限の物しかありませんでした。何よりも詩作活動に没頭し周りが見えていない生活の中で、母仲は苦勞をしてきたようです。

露風の日記によると、三鷹時代の夫人は質素な中でも小林夫人、杉沼夫人、岡崎夫人と時折お茶会や買い物に出かけ、趣味は「菊の花」という生活を楽しんでいた。

三 詩人露風を文学的に支えた夫人

（1）雑誌『未来』の詩の選り分けを手伝う夫人

大正二（一九一七）年秋に、露風を中心に「未来社」が結成され、

翌三年二月に雑誌『未来』を創刊した。内容は詩や評論、音楽関係である。その一ヶ月前に結婚したなか夫人は、新婚早々から自宅を訪れる「未来社」の同人たちの対応に追われることになる。

雑誌『未来』の発行は、中断の時期もあり大別して①大正三年二月及び六月、②大正四年一月及び二月、③大正六年一月～九月及び十一月の三期に分けられる。

なか夫人は、この第三期目の雑誌『未来』の編集を手伝っている。露風が長期の旅に出かけたため、夫人は同人の若手たちと雑誌『未来』の編集や詩の選り分けをした。その時の苦勞を『八幡太郎ノート』に日記的に記していて、未公開のまま三鷹市に所蔵されていた。^{（注13）}「ノート」には「七月十八日」とあるだけで記載年はないが、

内容から露風のトラピスト修道院訪問の第二回目、大正六（一九一七）年七月（八月帰京）と推定される。雑誌『未来』八月号の編集であろう。この奥付によると発行者は「三木操」、発行所は「未来社」、住所は露風の自宅「東京市外池袋四七五」、「社友の詩稿は露風がこれを撰抜す。メ切は毎月十二日」とある。

日記の記載は、原稿締め切り日後の七月十八日、十九日、廿日だけであり、八月六日印刷納本、九日発行を控えた編集作業の状況や夫人の苦惱がづづられている。なか夫人に関する貴重な資料であり、直筆「ノート」を翻刻して全文を載せることにした。

七月十八日

主人が発発してもう八日になる、前年ゆかれた時は、非常に一日が永い様に思へたが、こんどは日の過ぎるのが早い様に思われる。午後には楯守が来たけれど、むかいが来てかへった。

今、未来の原稿をあれこれと頁を儘（拵力）らへて居るけれど思ふ様にはかどらない、自分には詩をい、かわるいか見わけける事はとてもむづかしいが、それでも手さぐりをする様な眼で其の内からより出した。そして八人程みわけた時草間の原稿になった。いくら見て居ても見るほど解らなくそして頭が痛くなる。もう日は暮れかけて居る。其時まぐれの郵便やが来た。それに主人から原稿が来たそれで少し気づよくなった気がした。空腹を感じてきたので食事しようとおもったがなにもするげんきわない、ある物ですませた。大へん疲れた様に思った。夜の相守が来た辻町の方へ散歩に行くと言ふから電氣の玉を買って来る様にたのんだ。なんだか今日はわびしい日でそしてせきにんのあるだが其の為に快してげんきは出なかつた。

三嶋章道来た日

十九日

今日も晴れ朝早くた、みを拭いたり家を掃除した。井戸が二三日前からこはれてまだ直らない向の井戸へもらいに行くので随分水を大切につかう水の少ない程不自由の事はないと思つた。そしてトラピストの事を想つて居た。相守が朝から来て呉れた。そして十一時頃まで居たので大分出上つた。午後に藤森が来た其の内に濱野と北村が来た三人は何かと話し合つて居た。北村は詩集の批評新聞なぞ見てゐた。濱野に灰野さんの家へ原稿をもらいに行く事を頼んだ。夜は水が不自由ながらも行水をつかつた。そこへ斎藤が来た。それで

餘録を書くことにした。そして明朝灰野さんの家へ原稿をもらいに行くと言ふことを約束した。そしていなやを社の方へ明日午前に電話を掛けることにした。

七月廿日

今日は原稿が集ると思つて色々朝の内から用意して居た。今日も相守が来て呉れた相守の居る内斎藤のところへ電話を掛にいった。灰野さんの原稿が出来ないので又あてがくるつた。相守の家からむかいが来た。それで目次や廣告を書くに來ると言つて歸つた、すると直きに女中が手紙を持つて來た。家に歸へりましたら父が小言を云いまして當分外に出さぬと。それで色々仕事のこつて居ますからこの者にお渡し下さいとの意味であつた。だけど女中には自分は渡さなかつた。相守にとっては気がかりではあるをけれど。又自分も困るけれど。志かられたと言ふ事が可愛さうであつたから。濱野がやつと午後に来た。まだ灰野さんの原稿も明朝まで待つて呉れと言ふし加藤さんも昼時でなければ出来ないと言ふし、本當に困つて志まつた、なにもかもゆき違ひになる様でかなしくなつて來た。

留守にした露風に代わつて雑誌の編集をした夫人は、難解な詩のため頭が痛くなり、責任を感じつつ何もする元気がなくなつた。あげくに井戸は壊れてもらい水をする状況の中で、頼りの相守は父親に外出を禁じられ、さらに二人分の原稿が遅れるなどの三日間、「なにもかもゆき違ひになる様でかなしくなつて來た」のであつた。

この日記に見える名は、未来社同人の若い詩人である草間省、梶守事麿、齋藤正雄、濱野英二、北村初雄、藤森秀夫、原稿の遅れた灰野庄平（劇作家）、加藤精一（新劇・俳優）である。来訪者としての三嶋章道（小説家・劇作家）は、三嶋通陽の筆名であり大正五年に学習院高等科を中退し、この頃は同人誌「三光」などを創刊し創作活動をしていた。三鷹市所蔵の露風直筆ノート『読書餘録 個人別社友名簿』には、「北村初雄 横浜市南太田二二九」、「加藤精一 麴町区九丁目十四番地」、「市外千駄ヶ谷七百六十二 三光會 三島通陽」と記載されている。

一九日に「北村は詩集の批評新聞なぞ見ていた」とあるのは、七月一〇日に露風の序文付で刊行された北村初雄の処女詩集『吾歳と春』（未来社）の批評であろう。

(2) 露風と世の作者のために著作権を守る夫人

なか夫人は、知人からの手紙により露風作品の無断使用のことを知った。それに対する夫人の返信（手紙の下書き）が、未公開のまま三鷹市に所蔵されている。^(注1)これは、なか夫人の著作権に関する考えを知る貴重な資料であることから翻刻して全文を掲載する。

御手紙を難有拝見いたしました。本年はことにお寒いやうに思はれます。こちらは昨朝小雪が積っておりましてこの家からはよい眺めで御座いました。さてお手紙によりますと今度日活で三木の作詞「ふるさと」を映畫にするさうですが其事に付いては初耳です、御手紙の内に藤原氏とやら大方藤原義江ではないかと思はれます。藤原氏は以前も三木の詩をレ

コードに吹き込み莫大なる謝禮を取り洋行までした人ですが、作歌者たる三木に対しては何んの挨拶もなく當時三木が立腹して居りましたが、今後、映畫になる事は誠に喜ばしき事ですが言葉あつてこそそれが映畫にもなるわけですから作者に対して御挨拶のあるのは當然のことにて、もし無断にて封切するときは抗義を申込むと申して居ります。

藤原氏とかいふ方が係りのやうに御手紙にあります。しかし結果は会社にあるのです、それで封切までに会社の方から何とか御挨拶があつて皆円満である事を望みますのです。いつ頃までに映畫が出来上がるのでせうか、恐れ入りますがお知らせくださるやう願ひ上げます（前にもある事ですし今後三木一人の為でなく世の作者の為にも）

なか夫人は、知人の手紙により日活で露風の作詩「ふるさと」を映畫にすることを知った。その映畫は、昭和五（一九三〇）年三月一四日公開、浅草オペラのスター藤原義江主演の「ふるさと」（日活、溝口健二監督）である。藤原は以前も三木の詩をレコードに吹き込んだが、何の挨拶もなかったのが当時露風は立腹していた。そのレコードは、昭和三（一九二八）年二月発売「ふるさと」（ビクター、斎藤佳三作曲）と思われる。

露風は、今度も無断で封切となつたときは抗議するとうし、なか夫人は、事を荒立てずに円満解決を望む。映畫化することは喜ばしいことであり、主演の藤原義江の責任というより会社からの挨拶があつて皆円満に解決することを望んでいた。また著作権問題を露風個人のためだけでなく、世間の作者の問題として考えてい

たのである。

手紙が書かれた年月は不明であるが、映画が昭和五年三月に封切であることから昭和四年末から五年初めの事であろう。なか夫人は、映画に対する理解とともに作品の著作権のことまで気を配っていたことがうかがえる資料である。

(3) モニカと呼ばれた夫人

なか夫人は、大正一一(一九二二)年に受洗して洗礼名をモニカ、露風はパウロという。露風は、夫人を日常では仲子と呼んだ。また、トラピスト修道院を辞してからの著書に夫人に対し「愛妻モニカ」、自身は「ポーロ」と署名して贈っている。その署名文と著書を年代順に示すと次のようになる。^(注15)

①「二人の作った此著を喜を以て我が妻のモニカに贈る

一九二五年八月十二日羅風三木ポーロ」『修道院雜筆』(大正

一四年八月二日、新潮社)

②「我が最愛の三木モニカに贈る 一九二六年一月十五日 三木

ポーロ」『修道院生活』(大正一五年一月一日、新潮社)

③「すず蘭も黄菊も紅き姫百合も、なれに似たりと思ふ此夏 愛

妻三木モニカ様におくる 一九二六年六月 羅風三木ポーロ」

『修道院詩集 信仰の曙』(大正一一年六月二五日、新潮社)

④「愛する我妻の三木モニカに贈る 汝と共に在りて作りし此歌

集を心から贈る 一九二六年六月」『トラピスト歌集』(大正

一五年六月二五日、アルス)

⑤「愛する我妻の三木モニカに贈る 一九二六年七月二十四日

ポーロ三木操」『神への道』(大正一五年七月二十日、イデア

書院)

⑥「我が愛する妻のモニカに贈る 一九二六年十月十六日 ポーロ

露風」『童謡集 お日さま』(大正一五年一〇月一〇日、アルス)

⑦「我が愛妻の三木道子に贈る 大正十五年十一月二十三日 露

風」『三木露風詩集 第一巻』(大正一五年一月一六日、第一

書房)

⑧「我が愛する妻の三木モニカに贈る 昭和一年十二月 三木

ポーロ」『詩歌の道』(大正一四年七月一五日、アルス)

⑨「我が愛する妻の三木モニカに贈る 昭和二年二月十日 三木

ポーロ」『童謡集 真珠島』(大正一〇年二月一八日、アルス)

⑩「天父と閑古鳥 我が愛する三木露風の妻のモニカに贈る」

「一九二六年五月三十日 青森県三本木にて 三木 操」(平成

三年発見、和紙の巻紙に墨書き、長詩篇「天父と閑古鳥」、詩「妻

に」)

露風は、大正一四年から昭和二年の間に刊行した九冊の著書に愛妻モニカと署名して夫人に贈っている。そこには「二人で作った此の著を喜を以て」や「汝と共に在りて作りし此歌集」と感謝を示し、露風を支えてくれた夫人を「鈴蘭・黄菊・紅い姫百合」に似ると詠む。露風は、大正一四(一九二五)五月二七日作の詩「鈴蘭」(三鷹市所蔵『カトリックの精神(創作ノート)』)で、鈴蘭を「愛らし鈴蘭よ 野にすわつてゐる幼い子供のやうな 白い花の鈴蘭よ」と表現している。鈴蘭は、ヨーロッパでは古くから聖母マリアの花とされていて「謙虚」「純潔」などの花言葉である。「愛妻モニカ」を象徴する花であろう。

なか夫人は、露風が「モニカに贈る」と記した著書と書簡を大切に

に保管していたのである。

四 モニカの文学作品

なか夫人が作品を残していたことは、ほとんど知られていない。本来の文学的才能か、新婚早々から「未来社」の同人たちに接し、雑誌『未来』の編集の手伝いや詩人露風に身近に接しての素養なのか、いずれにせよ作品は意外と多い。その短歌、俳句、詩は、公表されることなく露風の直筆『ノート』や『手帳』に記されたままであった。「モニカ」は、大正一一（一九二二）年四月一六日からの洗礼名であるが、夫人の作品のほとんどに筆名として「モニカ」を用いている。露風は「ポーロ・パウロ」とある。

（一）夫婦による唱和歌・短連歌

夫人は、和歌を露風と合作して完成させる、いわゆる短連歌の形式で歌を作っている。それは、相互に創作と鑑賞を即興的にする機知に富む文芸、ことば遊びでもある。その直筆の歌を翻刻した。

- ① 閑古鳥啼けばこたふる山彦の
いと静なる初夏の森
ポーロ
- ② 八重櫻咲き初めにけり
夕暮の我家の庭の薄ら明りに
ポーロ
- ③ 静なる雨の音聞く初夏の
若葉の園を思ひたりけり
ポーロ
- ④ 垂れ込めてあれば淋しくなりにけり
雨続く日は鳥も啼かずに
ポーロ
- ⑤ 青海に波立ち騒ぐ風の日は
モニカ

白帆の影の波にまがえり

ポーロ

⑥ 六月の星あまたなる北國に
烏賊釣り舟の見え初めにけり

モニカ

⑦ 夏の夜の御空に月の照り映えて
都の空のうつくしきかな

パウロ

⑧ 雨降りて色増す青の我が庭よ
風も交じりし水無月のくれ

モニカ

⑨ 梅花にもかよへる香を焚きにけり
春雨の降る夜の静けさ

羅風

⑩ 春浅き籬の内の猫やなぎ
ふる雪にしも白くなりけり

道子

⑪ 垂れこめてけふ一日は暮れにけり
しづかに雨の降る音のして

モニカ

⑫ 白菊と黄菊と生けし秋の日に
かをり床しき室の明るさ

露風

⑬ 秋の夜のともしのもとに衣を縫ふ
日毎く／＼に冬の来ぬれば

モニカ

⑭ 春のきたるを告ぐるにかあらむ
師走なる都の町に小鳥啼き

露風

①②③④は、霞城館所蔵『16 NOTE BOOK』所収。大正一一（一九二二）年四月から大正一三（一九二四）年六月末までのトラ

ピスト修道院時代の作である。⑤⑥⑦は三鷹市所蔵の『ノート』短歌日本カトリック教徒大会詠』にあり、大正一三（一九二四）年の作と思われる。⑧は三鷹市所蔵の『ポケットサイズ手帳』所収。⑨

⑩⑪⑫⑬は霞城館所蔵、ノート『緑星』（三木モニカ）所収、帰京した大正一三（一九二四）年七月の戸塚時代から昭和二（一九二七）年秋頃までの作。⑭は三鷹市所蔵『大正十三年新文章日記』（新潮社）の「十二月三十日」所収、昭和二八（一九五三）年～昭和三二（一九五七）年頃の作である。

連歌は、五・七・五／七・七と七七／五・七・五の形式があり、①③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬は前者、⑭は後者の形式、②は五七／五七七形式である。

①は、ポーロが閑古鳥の啼き声がこだますると詠んだのに対し、モニカは「閑古鳥」の名の由来から鳴き声が人を呼ぶような寂しげに響くのは人里離れた静かな初夏の森と応じた。②は八重桜が咲きはじめると詠んだのに対し、ポーロは大景から小景（夕暮↓家↓庭↓八重櫻）と焦点を絞る。少し「咲き初め」に対してかすかな「薄ら明り」と応えたか。桜はまだ「薄い」（まばらである）意の面白さもあるか。③は、モニカの「雨」、季語「初夏」から、ポーロは夏の季語「若葉雨」を発想、「雨の音」（聴覚）と「若葉」（視覚）を対比させる。④は、ポーロが「垂れ込めて」と「淋しく」となると詠んだのに対し、モニカは「垂れ込めて」を家の中に閉じこもって外に出ないでいるの意と、雨雲が低く垂れているの意を掛詞的にして「雨続く日」と応え、「鳥も啼かず」静かなのでと応え「淋しくなり」に寄り添う。

⑤は「波」という語を共有させ「青」と「白」、「騒ぐ」と「まがえり」（紛える）、「風」と「帆」を対応させる。モニカの「波」が立ち騒ぐ「風の日は」と詠んだのに対し、ポーロは「風」を受ける「白帆」も騒ぐと思いきや、帆（白）の「影」（黒）が「波」に入り

乱れるという発想の面白さがある。⑥は、モニカが天上の「星」が多く見えると詠んだことに対し、ポーロは夜空に光る星を夜の海に浮かぶ「烏賊釣り船」の「灯り」と展開させ、六月から長く続く漁期のはじまりであると詠む。おそらくトラピスト修道院から臨んだ津軽海峡の景であろう。⑦は、パウロが夏の夜空の月が輝き照らすと詠んだのに対し、モニカは一般的に夜涼を誘う季語「夏の月」に対して「都の空」（蒸し暑さ）と詠んだか。

⑧の「羅風」は大正一三年五月から大正一五年八月まで使用した。創作年は不明であるが、六月の雨により生命力が増す庭を詠む。直筆『手帳』には庭の「緑」を生命力の象徴「青」に書き換えた跡がある。モニカは、羅風の「雨降りて」に対し「風も」と応じ、その季節は「水無月」（水の月）と詠む。六月の異名「青水無月」の「青」は青葉の茂る時を意味する。モニカの「水無月」は羅風の「青」からの発想か。

⑨は、羅風が梅花にも漂う香を焚いたと詠んだのに対し、モニカは細やかに降り続く春雨の静けさゆえと詠む。また「かよふ」を入り交じるや似かよふの意とするとその香は春雨により梅花が咲き漂う香と応じたか。⑩は「道子」と「羅風」とある珍しい例である。春を告げる猫やなぎの銀白色の毛に被われた花穂は、春がまだ浅いので降る雪で「白く」なったのだと応じる。⑪は、モニカが家に閉じこもって日が暮れると詠んだのに対し、露風は「垂れこめる」のは雨雲がおおっているせいで家の中に籠っている、「雨の音」だけがする静かな一日と寄り添う。⑫は、秋の日に白と黄の菊を活けたと詠んだのに対し、その香が室に漂い明るくなったと応える。「床しき」は「床敷き」と「ゆかしい」（気品・情緒があつておくゆか

しく心惹かれる)の意もあるか。⑬は、秋の夜長に灯りの下で縫物をするに詠んだのに対し、それは間もなく訪れる冬のためと心える。「ともし」には、「乏しい・不足」の意味も含むか。

⑭は、露風が春を告げるのはあるだろうかと詠んだのに応えて、一般的には「春告鳥」の「鶯」であるが、モニカは「春」(二月)より少し前の「師走」(十二月)、それも都に啼く「小鳥」であると詠む。この歌は日記の「十二月三十日」欄に記載されている。

この他にも露風の『ノート』や『手帳』には、露風の作と共に「モニカ」と署名された作品が多数ある。その特徴は、短歌のほとんどが露風と創作の場を共有していることである。なか夫人の文学的素養を示す貴重な未公開資料であることから、次に各資料から抽出して年代順・掲載順に翻刻して掲載する。数が多いため、作品を理解する簡単な参考を付すだけにして鑑賞などは省略した。(直筆のノートや草稿の判読不可能の部分は□で示した)

(2) 『トラピスト歌集』(大正一五年)の草稿にある作品

(霞城館所蔵『16 NOTE BOOK』所収、大正一三年・

一九二四年春から夏にかけての作が多い)

①何の樹か菰着て過す北の春

モニカ

②枯葉の小径をゆけばうらうらと春まだあさき松風の音

モニカ

③眺むれば春あさき野に羊らのはるか向ふに群れあそぶ

モニカ

④小春日の杉の並木の道ゆけばうづたかく積む木の香ぞ高き

モニカ

⑤日だまりに草の實ひろふ雀哉

モニカ

⑥春雨や煙れる中に小鳥なく

モニカ

⑦春雨の霏たちこもる丘の上夕の鐘のなりゆらぐなり

モニカ

⑧春雨やすすることもなく日は暮る

モニカ

⑨牧場の朧月夜や水だまり

モニカ

⑩雨霽れて雫の落つる一しきり朧月夜の風のまにまに

モニカ

⑪風やみていと静かなる雨なれど潮騒の音高くきこゆる

モニカ

⑫鶯の谷わたり聞く晝眞晝

モニカ

⑬春雨に鶯を聴く湯槽かな

モニカ

⑭春雨の霽れし雲間の紅き空小鳥の啼ける夕の一時

モニカ

⑮浅茅生の池の水の面に日は照りて鶯なけり初夏の日に

モニカ

⑯街道の馬啼く声春暮る

モ二カ

⑰初夏の雨霽れにけり鳥啼く山の麓は静に暮れて

モ二カ

⑱初夏の雨は静にふりそゝぎ林鹿の家は早暮れにけり

モ二カ

⑲櫻咲く向ふの海は青くして舟の通るを□がらに見る

モ二カ

⑳月の夜は更くるも知らで語りなど歌語りなど山の一家

モ二カ

㉑櫻咲く家を訪ねて来りけり引戸の音のなつかしさかな

モ二カ

㉒北國の麓の風は荒くして雨にまぢりて強く吹き打つ

モ二カ

㉓北國の春を吹く風強くして夕の鐘のとぎれくに

モ二カ

㉔春雨の鶯立ち罩めて深々と麓の家に潮の遠なり

モ二カ

㉕春雨や鶯の声うるみたり

モ二カ

㉖年毎に訪れ来る鳥の數山家の春は楽しかりけり

モ二カ

㉗北海に春の来るは遅くして月の光を吹く風白し

モ二カ

㉘我家の櫻の花は盛りたり月は静に上る夜櫻

モ二カ

㉙大空に月は静に上りたりポプラはゆらぎ風の音して

モ二カ

㉚そよそよと風は吹き来る笹の葉に月はさやかに光たりけり

モ二カ

㉛葎切の啼きそめにけり初夏の我家の前の澤のほとりに

モ二カ

㉜青葉にまぢりて咲けるたんぼゝの黄なるはうれし路のほとりに

モ二カ

㉝山裾の梨の畑は花盛り森の梢に閑古鳥鳴く

モ二カ

㉞雨霽れて雲まばらなる野の末の森の彼方にほととぎす啼く

モ二カ

㉟雨霽れて霞立ち行く麓には鳥かぎりなく鳴き初めにけり

モ二カ

㊱花園の花に静に置く露の雨霽れの時を保ちけるかな

モ二カ

㊲若葉みな光りたりけり初夏の谷に来たれば水の音して

モ二カ

㊳山裾の梨の畑に雨降りて山路を急ぐ横降りに降る

モ二カ

㊴青草に光り輝く初夏の日は山陰に沈まむとする

モ二カ

④ 風の日に波のまにまに行く舟のそのなりはひを思ひやらるる

モ二カ

(3) 大正一三(一九二四)年五月一五日付け書簡にある作品

(霞城館所蔵『アト 24 日記及び書簡』所収)

① 枯葉の小径をゆけばうらうらと春まだあさき松風の音

モ二カ

② 年毎に訪れ来る鳥の藪山家の春は楽しかりけり

モ二カ

(六月末にトラピスト修道院を辞して上京することを伝える露風から五十嵐力宛の書簡控の中、露風の「近詠」三首の後にある)

(4) 大正一三(一九二四)年頃の作品

(三鷹市所蔵『アト 短歌日本カトリック教徒大会詠』所収、

表紙に一九二四年一〇月一九日曜日作と記載)

① 霧の夜は淋しかりけり初夏の風にまぢりて波の音聞く

モ二カ

② 遠山に霞たなびく初夏の聲この牧場に牛は啼きたり

モ二カ

③ 初夏の谷の若葉は深々と繁みの中より水の音聞く

モ二カ

④ うら／＼と日は輝きて若葉する林の中を鳥は飛びゆく

モ二カ

⑤ 青葉にまぢりたりけり蒲公英の白き綿毛はとびもやらずに

モ二カ

⑥ 青空は澄渡りたり輝きて葭切の啼く真晝なるかも

モ二カ

⑦ 山の霧は晴れ行きにけり青空に夏雲白くのがぞくが見ゆる

モ二カ

⑧ 松風の聲にまぢりて波の音聞くは楽しき松の林に

モ二カ

⑨ 「温泉宿にて」

夕暮の障子の外に湯の音を聞きつゝ、友と語る楽しさ

モ二カ

北國の温泉宿の庭に咲くりんこの花は美しくあり

モ二カ

⑩ 新緑の朝の蝦夷富士雲晴れて六月半ば雪は残り

モ二カ

⑪ 阿蘭陀の運河に似たる小樽港下駄穿ける人釣りしてあたり

モ二カ

(右の歌の直前に露風作「小樽公園にて立てる木を詠める」一首がある。露風は大正一三年六月末にトラピスト修道院を辞して帰京する。同年六月一二日付、母の再婚相手・義父碧川企救男宛手紙控えに、帰京前に小樽に住む碧川家を夫婦で訪れるとある)

⑫ 初夏の小樽の町に雨降りて若葉うるほふ汽車の音して

モ二カ

⑬ 大沼の若葉の森に霧かゝり朝の旅路は心地よきかも

モ二カ

⑭山と山連なる麓家まばら明け行く朝に煙立つ見ゆ

モニカ

⑮いざよひの月の光は照りわたり海邊の波はしづかなりけり

モニカ

⑯緑葉を立ちつらねたる坂路を聖體行列上りゆくなり

モニカ

(右の歌の直前に露風作「一九二四年六月朝トラピスト修道院の聖體行列に参加して」一首がある)

⑰聖歌うたふ行列のゆく青葉路香爐の煙ゆらぎたりけり

モニカ

⑱空青く若葉はすべて光なり真晝の中に風はそよぎて

モニカ

⑲北國の星の夜空は美しく天の川とはそこ知らるゝ

モニカ

⑳夕暮れの青葉の先に来てたゝく水鶏の音を日毎にそ聞く

モニカ

㉑東京の家と家とは重なりて狭き空にも恵みありけり

モニカ

㉒狭庭にも夏は楽しき夕かな

モニカ

㉓「日本カトリック教徒大会詠 於東京関口天主教教会
一九二四年十月十九日日曜作」

はるぐゝと見はるかす野にたたなはる雲の中良に富士の山見る

モニカ

武蔵野の野菜畑の連なりて富士の高ねを木の蔭に見ゆ

モニカ

武蔵野の秋の並木をなつかしむ梢の蔭に百舌(鶺鴒)の啼く声

モニカ

(5) 大正二四(一九二五)年八月二四日の作品

①「三木モニカの作／一九二五年八月廿四日信濃安代温泉にて」
(三鷹市所蔵『ポケットサイズ手帳』所収)

車中にて

山百合や名も知らぬ花咲きてあり信濃の旅の山麓に

千曲川橋をわたりて見わたせば稲田霞みて山のつらなる

車中にて

朝ぼらけ霞む山々つらなりて稲田も青く見えそめにけり

信濃なる山路をれば秋草の千ゝにみだれて咲てありけり

②「信濃安代温泉にて、一九二五年八月廿四日」

(霞城館所蔵、三木モニカ『緑星』所収、「山間歸途」)

夏の夜に稲田のほとりわがゆけば水の音にまちり虫の聲する

山裾に灯はともりたり路ゆけば風のそよぎに稲の香のして

みそはぎの赤く咲きたり水の邊にうつるも涼し湯の宿の街

(夫婦で長野県信濃安代温泉に出かけた時の歌。露風は、日

記に八月廿四日午前七時十分すぎに豊野駅に着し、安代温泉
に至り山崎屋に宿る。紀行文「信濃の旅」を書く。夕暮モニ

カと共に散歩し、夕の空が美しく宵の明るさが甚だ美しく、

又楡形の月が鮮やかにでていたと記している。露風は「湯の

宿に霞みて見ゆる夏の山そよぐかぜ吹きて鳥の飛びゆく」を

詠む)

(6) 大正一五(一九二六)年二月八日の作品

(霞城館所蔵『ノート 一九二五』所収)

「土筆 モニカ作」

葉はたけ越えて

向うの岡に、

春まちがほに

木の芽が萌えて、

土筆生へた、生へた、

袴をはいて、

どこに行くのか、

立ちならぶ

こゝは日だまり、

雨ふりあげく、

ふとつた土筆が、

立ちならぶ

一九二六年二月八日

(7) 昭和二(一九五三)年頃の作品

(三鷹市所蔵『ノート 短歌・童謡・日記』所収)

① 武蔵野のとき彼方の松並木空は霞みて風のそよ吹く

三木モニカ

② 花吹雪人の小袖にふりかかる小金井堤雲雀鳴くかも

モニカ作

③ 武蔵野の並木の原に蓬摘む空に雲雀の声をききつつ

モニカ

(8) 昭和三二(一九五七)七月の作品

(三鷹市所蔵『大正十三年 新文章日記』「七月二十七日日

曜日」欄)

「昭和三十二年七月の日記 三木露風」

夕焼の光洩れくる椎の木の茂みの中に蝸の啼く

モニカ

(右の歌の前に、露風作「今日は主日なれば安息日の歌を作る」
一首がある)

(9) 創作年代不明の作品

(霞城館所蔵『ノート 6』所収)

「春 三木モニカ作」

菫、蒲公英、紫雲英、

畑には菜の花咲出した。

春の野路は楽しいな。

風もそよそよあたたかい。

若葉が萌ゆる梢には、

小鳥も来て鳴く、歌ひます。

日はうらうらと照中を、

私は行かう野の果てに。

空と青葉、地平線、

春の日ざしのうらうらと、

輝く晝の静けさに、

すべては憩ふ、若くして。

(10) モニカと署名はないが「花更紗便箋」に書かれた作品

(前掲、なか夫人が「ふるさとの」映画化について書いた

便箋の表紙「花更紗 於巴里 虹児作」にピタリと収まる

路谷虹児の「花更紗」便箋に書かれ、筆跡も似るので掲載

する。三鷹市所蔵、鉛筆書き一枚)

「十三夜」

郊外の我家のほとり

今宵十三夜の月

黄ばみたる稲田の上に

昇りたり

新道に荷車の

帰る音まばらに

空と野に響く

ばん秋の野は

ふかぐくとくれて

その中に鈴虫と

こほろぎのかそけき声

見える野一面に
静、月の光とともに

(挿絵画家の路谷虹児は大正一四年・一九二五年〜昭和四年・一九二九年までフランスに留学。パリ風のモダンな画風の挿絵、女性の後ろ姿入り便箋表紙は、借金返済のため帰国し心ならずも挿絵画家生活に戻った頃の作。詩は「郊外の我が家」とあり、昭和三年・一九二八年三鷹村牟礼に移住した昭和初期の作か)

五 なか夫人の『八幡太郎ノート』所収作品

(作品にモニカと署名はないが、三鷹市所蔵『八幡太郎ノート』に所収。前掲、なか夫人の雑誌『未来』編集状況の日記に続いて書かれている作品であること、筆跡の類似から参考作品として記載する)

①詩「多そがれ」

多そがれ

野はふくらかに高く

やわらかき空のさかいに

日は野面の蔭におち

風ふく

路のべの花は

葉と葉とのうらに

ふるへつゝ落つる音

③詩「五月」

五月

我れあゆめば

薄月はかたむきたり

音おこりて

何物の音もなく

ゆくものの中にこだます

こ、一面に水気立ち
よわき蛙の鈍きこゑのみ

②詩 無題

月よ

我が愛する初秋の月

竹林は重たげに頸振る
くろき蔭よりこゑおこり

白きまばらなる雲の間より

けだ物のうめきが如く

白く光ゆく雲光り動きて

寂寞は月に綱をなす

野は一面に

其志づまりの中

草は灰白く流れの如く路なりに

我とその蔭とは働く。

生いふしたり

④短歌七首

高き木しくき木皆しげみ

菜の花にきてはくるへるてふなれどにはいみだれてこころか

光は白く葉の上にさゝなみの様に

なしむ

夢見つゝ、蟬のはね音

知りそめし君がみこゝろ思ふときおさな心になみだこぼるゝ

茂みの中に落ちつくらし

おとをとの再後の別れおしまれて今あたりしくふるき名をよぶ

ア、白き月よ我は聞く

庭に咲くおしろい花の夕咲きをせめて再後の真心の花

我が心の内に我が愛する月よ

つめたきに再後の疲れなせくれと我れ手をとればよろこびて

死す

梨の實をむくもせわしくおとをとに再後の食と思ふも悲し

おとをとの口にぬらせしふで志づくかはく時なくとわにかいらじ

⑤短歌「思い出の種」

春なれば種まかんとておしろいの少なき多ねに思い出お、しこのたねが花である時おとおとに永久の別れを思ふも悲し

（露風の弟の勉は、支那の新聞社に勤めていて病気にかかり引き揚げてきて、大正七年・一九一八年八月中旬に上京して露風宅で療養したが看病の甲斐なく病状が進み九月一六日死去。門司にいる勉からの手紙で、病気の容体が思わしくないため上京して露風を頼りたいと言ってきた時、露風がどうしようかと夫人に相談したところ、来させなさいと勧めたという。勉の死に関しては、露風の直筆草稿「弟の死・去年のことども」（三鷹市所蔵）、「我弟の死」『国民文学』大正八年二月号がある。また、その頃の状況は霞城館所蔵「Pocket Diary 『AISHO VII』」の日記に記されている。右の④⑤の歌は全集などにも未所収である）

⑥詩「大根洗い場にて」

大根洗い場にて

ペレアス

あぜ道はしるペレアス

蛙は水の中にとびこむ

ペレアスのぞけば

くろいあたまは向の岸へ

あぜ道はしるペレアス

にほう葉たねのうつるのも

なんでペレアス知るものぞ

音なくくるう二ツのてふ

てふの心を

なんでペレアス知るものぞ

ペレアスのぞけば

犬の心にてふくのかげ

吹けば葉たねのほいのみ

参考、露風作、童詩「ペレアス」

（『お日さま』所収、大正一五年一〇月、アルス）

「ペレアス」

ペレアス

ペレアス

ペレアスよ。

白い子犬のペレアスよ。

ペレアスが、はしれば、

草が、にほふ、

木が、にほふ、

クローバの白い花も、にほふ。

羊が、出てゐる野の、
白い雲も、出てゐる野の、
赤い小家、
ペレアスの小家。

ペレアス、
はしれよ、ペレアス。
風が、そよそよ、
雲が浮く三月。

〔三木露風全集 第三卷〕補遺（九九九頁）の日記に、大正初期の三月二三日、生まれて一年未滿の「仔犬じみた」犬のペレアスが病氣になったことがある。フランス象徴派の影響を受けた詩人、劇作家のメーテルリンクに象徴劇「ペレアスとメリザンド」、一八九三年初演がある。それを台本としたドビュッシーの同名戯曲五幕ものオペラもある。日本語訳は、大正一二年『近代劇体系第一〇卷』小林竜雄がある。「ペレアス」は、アーサー王物語に登場する円卓の騎士「ペレアス卿」から名づけたか）

⑦詩 無題

今日も暮れはて
空に高く星はまばらに
その光は我が心をいたくすいやすが如く

我が心なみだくましくしばたゝく

星のまばたき と我が心の悲みの中に
がんのむれなきわたる

ア、がん我が悲みの上になきたもれ
我が友のかいなをとりたもれ

がんは知ろうか知るまいか
みやまかくれてないてゆく

春が来たからかへるのか
まことやがんのむれの内

春はくれどもあだ花の
すたれてのこる我が心

こくこくとしらむみねの上

⑧詩「みこころに祈る」

みこころに祈る

今日も我が心をおびやかす

天より来たるか地よりはきたるか

我が心の上をおびやかすすがた

ア、すくいたまへ君が大いなる手を持って我が心の上を

ねがわくば君がとぎされしとびらの内へ

我がつかれたる心をねむらせたまへ

今日も来ては君がみたまのおんまへに

花の香を持ち美しくしき言葉もて

そがすがたのたゝずむ時

我が心はおびへおのゝく

ねがはくば君がとぎされしとびらの内へ
小さき我がたましいをねむらせたまへと

今日も来ては我が心をおびやかす

⑨詩「我おさなければ」

我おさなければ

我がおさな子を

君知りなば

今もおさなく

君がみむねに

生いふすものを

君いづこにおはせしや

我おさなくて

君を思へば

君また我を思ふや

今もおさなく

生いふすものを

我れ今、思ふ

⑩詩「朝」

朝

青葉をゆらく朝風よ

空のカーテンに

露にぬれた若葉に

ぬくもれた肌をかすめてゆく

青葉の下には

たった一つの姫百合が

うつむきがちに思はれげに

ゆらく風よ

朝のなさけの露のしむ

花びらの甘き匂ひのかはかぬ間に

ゆらく風よ

したへのセツプンのかはかぬ間に

朝の風のきよくあれ

すべての上に。

⑪詩「雑司ヶ谷墓地にて」

雑司ヶ谷墓地にて

みどり葉にもゆるが如き落日の

きらめきそよぐ夕風

葉づれの音も静なり

墓の下には亡き人の

なさけのかよう今もなほ

一つ、一つに

只ちんもくの墓

なんとなく夕風の肌寒く
葉の道を歩む時

夕日のかゝる二人りの顔
葉のゆらぐまに〜

(大正一二年九月末、雑司ヶ谷墓地に三木家の墓を建て父
節次郎と弟勉の遺骨を埋葬する。三鷹市所蔵『大正十三年
新文章日記』には、昭和二八年九月一六日の弟の命日に墓
参りに出かけたこと、昭和三二年の「三木勉命日」に詠ん
だ露風作「蕭やかに雨は降りたり墓参り了へて帰りし宵の
ひととき」の歌がある)

⑫詩 無題

うぐいすの玉子よ
忘れてゐったおや鳥は
都の空で啼いてゐよう

西にや真赤な日が落ちる
このまゝかけすに置いたなら
ふくろーが来てのぞきます

赤いばらのつぼみの中へ
入れておきましょこの玉子
ばらの花の匂ふとき
知ってる者は百合ばかり

⑬詩 無題

谷間の草は生いしげり
その中につめたい白い花二ツ三ツ
草の根をふむ音
つかれた足を草に置き

青空に雲もなく
高き木の繁みのかげ
煙草の煙り草にほふ
ふつとかすめて

青葉に
すべりこむ 音もなく。

⑭詩「満月」

満月
芒の上のお月様
今日は十五夜お月様

芒うごけばかげうごく、
「かげや唐祿人
ふまいてみしやれ」
あるくかげには鬼が来る
鬼はかけだしふまねばならぬ
「影やとろく人

ふまいてみしやれ」

柿の木下にこゑがする

今日は十五夜お月様

白い光にこゑがする。

おわりに

なか夫人は、露風を経済的、文学的に支えた。また短歌・俳句・詩も作っていた。夫人は、何故にこれほどまで露風を支えたのか。水守亀之助が露風と初めて会ったのは、露風が中学二年、一六、七歳であった。水守は、その頃の露風について、次のように回想している。^(註16)

負けん気で、鼻っ柱が強くて、傲岸不遜とさへ見える彼のやうな早熟の天才兒は、どこへ行ったところで、人事關係がスムーズに行くわけではないのであった。寛容にしてよく己れを容れてくれる先輩か、唯々諾々としてくつついて来る友達か、弟子のやうな後輩かでなければ交りはつづかなかつただらう。それでなくてさへ、どうかすると自分の方から反撥してしまふ。いはゆる狷介弧峭とでもいふのであらうが、その癖、人なつつこいさびしがり屋でもあった。

露風と生涯を共にしたなか夫人は、水守の言う先輩・友達・後輩の要素を合わせ持った人柄であったのだろう。露風に対して広い心を持ち受け容れ、はいはいと何事にも逆らわずに従い、師に従って

教えを受ける内弟子のようであったといえる。夫婦で短連歌形式の歌を作り楽しみ、また露風の直筆「ノート」や「手帳」に記されている夫人の作品に、露風が手を入れた痕跡も見受けられることから文学の面でも弟子のような夫人であったと思われる。

なか夫人は、露風のかたくなに自分の意志を守り人と和合しない、人懐っこいが寂しがり屋の性格について、幼少期における両親の離婚に原因があると理解し、「大きな子供を育てる」という思いで接したのであらう。なか夫人の母のような愛情は、深層までに達していた露風の幼少期の傷を癒してくれたことだろう。露風は修道院時代に「妻と共に語りてあればいつしかに此世の憂を忘れはてけり」と妻への想いを詠む。^(註17) また夫人は「やむ我をなくさめんと鈴蘭を夫は生けたり枕辺の甕」と詠んでいる。^(註18) 結婚当初に別れることも考えた夫人は、わがままいっぱいの露風を深く愛し、気難しい詩人露風を生涯支えたのである。

なお、なか夫人の作品については、霞城館所蔵ノート『緑星』の作品と合わせて完成とするものであり、別稿を用意している。

謝辞

本研究は、令和二年度科研費（J P 2 0 K 0 0 2 9 7）の助成を受けた「三木露風の未公開資料の公開・整理及び基礎的研究」における成果の一部です。記して感謝申し上げます。また本稿を草するにあたり、貴重な資料の閲覧にご協力くださった東京都三鷹市役所スポーツと文化部芸術文化課並びに兵庫県たつの市の公益財団法人童謡の里龍野文化振興財団「霞城館」に感謝

申し上げます。

注

枚鉛筆書き

15 家森長治郎「三木露風未発表の長詩篇『天父と閑古鳥』について―翻刻、三木露風『天父と閑古鳥』『妻に―』『研究と教育』

第一六卷、一九九四年三月、一三三頁

16 注2に同じ、一四二頁

17 霞城館所蔵『NOTE BOOK』

18 霞城館所蔵『緑星』

参考文献

『未来』大正六年・一九一七年八月号、九月号、未来社

水守亀之助『続 わが文壇紀行』一九五四年、朝日新聞社

『三木露風全集』全三巻、一九七二年～一九七四年、三木露風全集刊行会

安部宙之介『三木露風研究』一九八三年、復刻、日本図書センター

安部宙之介『続・三木露風研究』一九八三年、復刻、日本図書センター

伊藤整『日本文壇史10 新文学の群生期』一九九六年、講談社

森田実歳『三木露風研究―象徴と宗教―』一九九九年、明治書院

家森長治郎『若き日の三木露風』二〇〇〇年、和泉書院

『国文学解釈と鑑賞 特集三木露風の世界』二〇〇三年一月号、

至文堂

和田典子「三木露風が『赤い鳥』童謡欄の選者を断った理由」『児

童文学研究』第三九号、二〇〇六年二月

和田典子「三木露風研究 新資料草稿『弟の死』をめぐって」『近

畿医療福祉大学紀要』第一〇巻一号、二〇〇九年六月

- 1 三木豊晴「養父母 三木露風と仲」『国文学解釈と鑑賞 特集 三木露風の世界』第六八巻二号、二〇〇三年十一月、六六頁
- 2 水守亀之助「三木露風 今昔物語」『続 わが文壇紀行』一九五四年、朝日新聞社、一五〇頁
- 3 安部宙之介「露風の生活」『続・三木露風研究』一九八三年、復刻版、日本図書センター、六六―六七頁
- 4 家森長治郎「三木露風となか夫人」『日本近代文学館』第二号、一九七四年十一月一日、八頁
- 5 注2に同じ、一五〇頁
- 6 注3に同じ
- 7 霞城館所蔵『Pocket Diary TAISHO VII』大正七年五月二十日の日記
- 8 注4に同じ
- 9 「詩人三木氏が童謡の講演／文化運動には大賛成／修道院で氏と会見」『函館毎日新聞』第三面、大正一一年四月二二日付
- 10 霞城館所蔵、直筆『ノート3』、『文章倶楽部』大正一一年一月に掲載とある。
- 11 安部宙之介「トラピスト修道院の露風」『続・三木露風研究』一九八三年、復刻版、日本図書センター、四七頁・五三頁
- 12 注1に同じ
- 13 三鷹市所蔵、『八幡太郎ノート』
- 14 三鷹市所蔵、手紙の下書き、落谷虹児「花更紗」表紙、便箋二